

第1章

長浜市の歴史的風致形成の背景

1 自然的環境

(1) 位置

本市は、滋賀県の東北部に位置し、京都市や名古屋市からはおよそ 60km 圏域、大阪市からはおよそ 100km 圏域にある。周囲は伊吹山系などの奥深い山々と、ラムサール条約の登録湿地でもある琵琶湖に面している。

市域は、東西約 25km、南北約 40km で、琵琶湖を含む本市の総面積は 681.02km² であり、滋賀県全体のおよそ 16.9%を占めている。

面 積		681.02km ² (うち陸地 539.63km ²)	
可住地面積		164.24km ² (30.4%)	
地 勢	位 置	東経 136 度 16 分 32 秒	北緯 35 度 22 分 53 秒
	範 囲	東西約 25km	南北約 40km

図 長浜市の位置



写真 長浜市の航空写真（琵琶湖（写真左側）、伊吹山系（写真上部中央から右側にかけて）を望む）



(2) 地理・地形

本市の東北部は急峻な伊吹山地で、滋賀・岐阜県境が金糞岳^{かなくそだけ}から伊吹山に続いている。伊吹山地は石灰岩を主体とし、緑色岩やチャートを伴う石灰岩相と泥岩、砂岩を主体とし、チャートを交える砂岩・頁岩相^{けつがん}とに大別される。ここから琵琶湖に注ぐ姉川や草野川^{たかとぎ}、高時川^{よご}、余呉川等が流れ、これらの河川は土砂を放射状に堆積させ、扇状地性の豊かな湖北平野が形成された。また、琵琶湖岸には湖岸風景が広がり、美しい自然景観を有している。

本市は、縄文時代早期に人々の生活が始まって以来、現在に至るまで様々な生活相を示しながら生成・発展してきた。京阪神や東海、北陸の経済圏域の結節点としての位置にあり、古くから東日本と西日本の文化の接点であり、かつ融合地帯であった。

図 長浜市の地形図

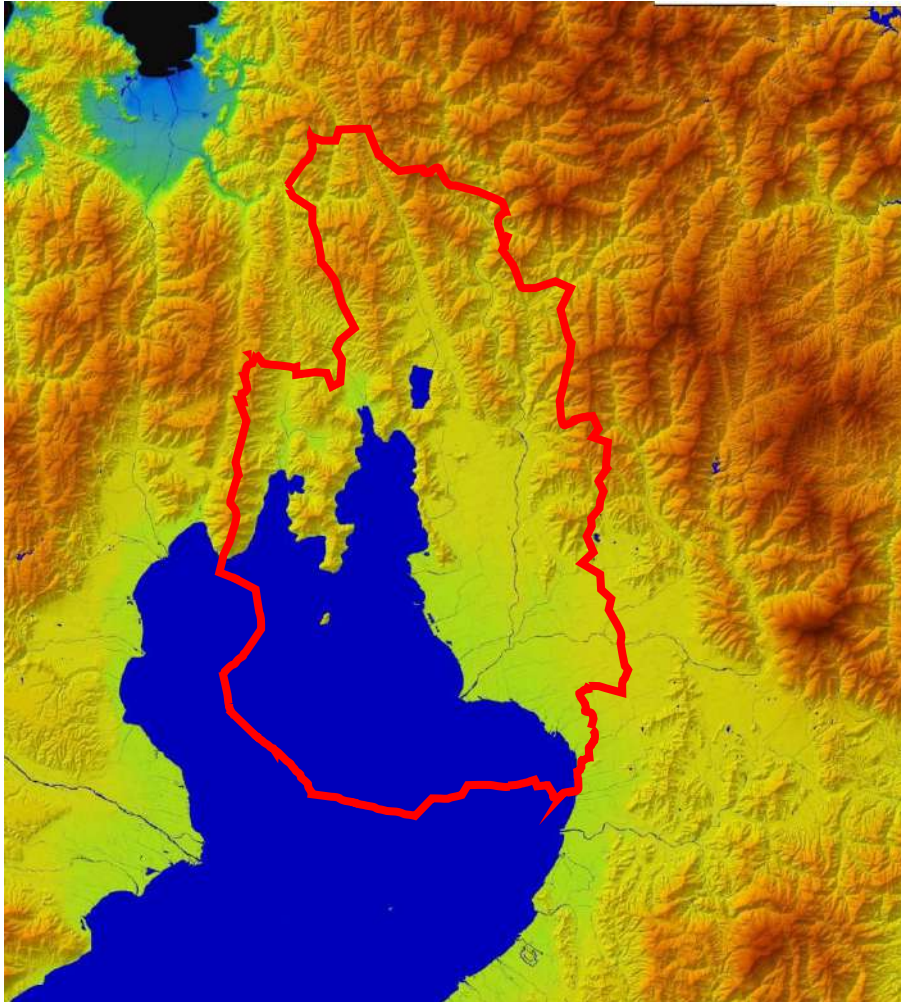
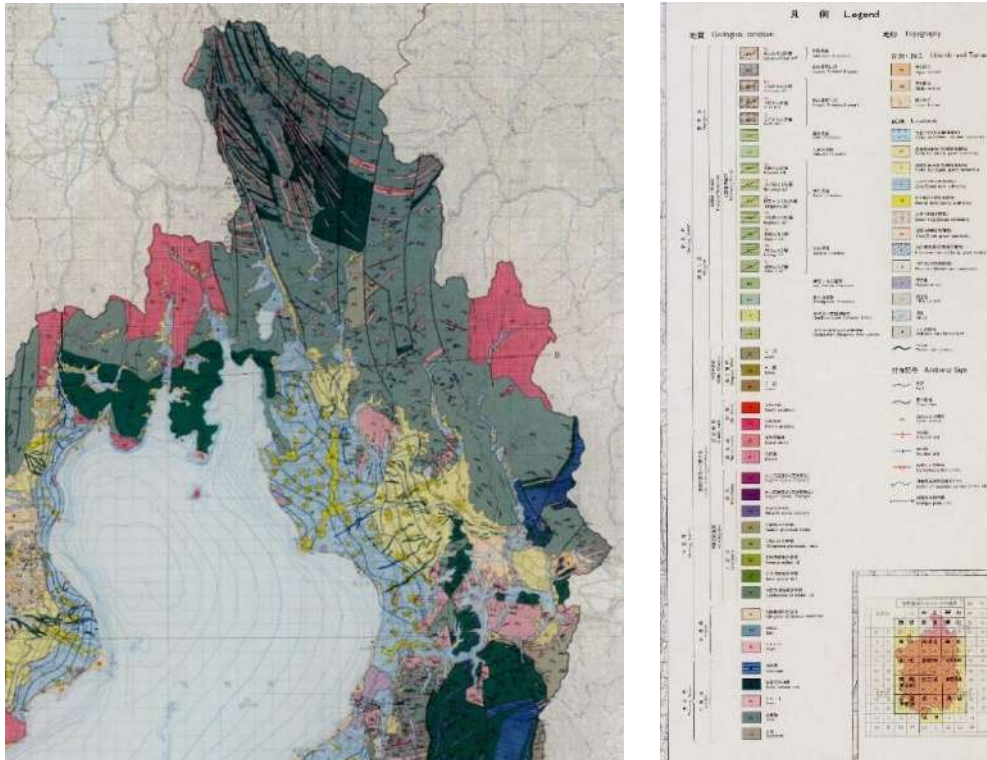


図 長浜市の地質図

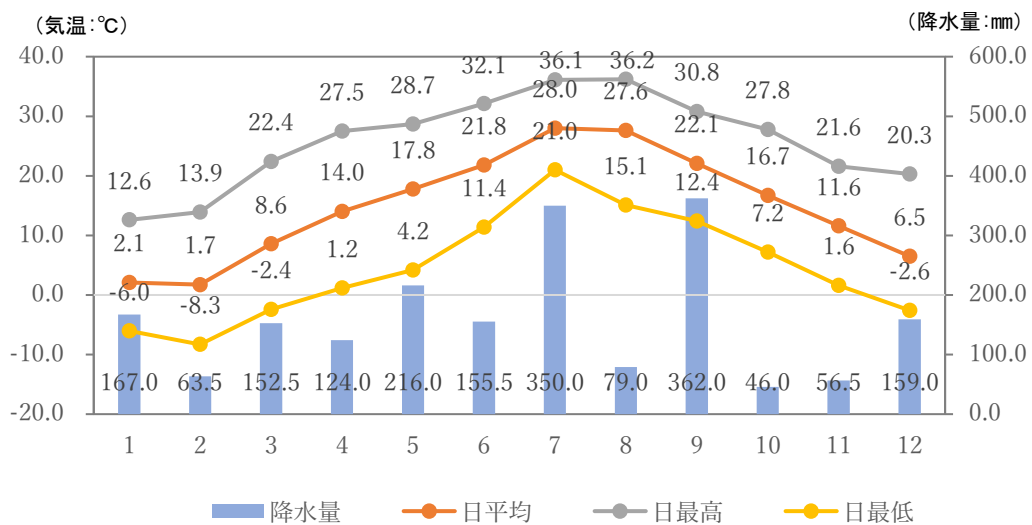


(3) 気候

本市は、雪による降水量の多い日本海型の気候である。若狭湾から吹き込む季節風が伊吹山地で上昇気流となり、雪を降らせる。市北部の余呉地域は、日本最南端かつ近畿以西唯一の特別豪雪地帯に指定されており、冬季の積雪が数メートルにもおよぶ。

平成30年（2018）の年間平均気温は14.9℃である。月別平均気温が最も高いのは7月の28.0℃であり、最も低いのは2月の1.7℃である。また、日別気温が最も高いのは8月の36.2℃であり、最も低いのは2月の-8.3℃である。

年間の降水量は1,931.0mmである。月別では9月が362.0mmで最も多く、7月が350.0mmでこれに次いでいる。



平成30年（2018）の月別平均気温と降水量

2 社会的環境

(1) 市の沿革

本市の都市部を形成する長浜地域※は、昭和18年（1943）に1町6村が合併して市制が施行された。

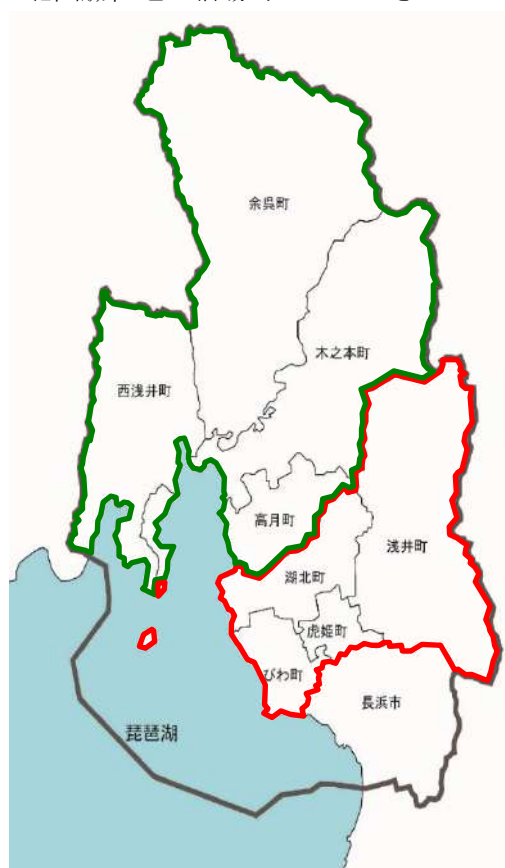
東浅井郡の東部に位置する浅井地域※は、昭和29年（1954）に4村が合併し町制を施行、浅井長政の領地であったことから浅井町と名付けられ、その後、昭和31年

（1956）に上草野村との合併を行っている。東浅井郡の南西部に位置し、姉川の肥沃な三角州に開けたびわ地域※は、昭和31年（1956）に2村が合併、昭和46年（1971）に町制が施行されている。東浅井郡の南西部に位置し、姉川、高時川、田川など豊かな水に恵まれた虎姫地域※は、昭和15年（1940）に虎姫村が町制に移行している。東浅井郡の西北部に位置し、浅井氏三代の根拠地となった湖北地域※は、昭和30年（1955）に2村が合併して湖北町となり、昭和31年（1956）に朝日村と合併を行っている。

伊香郡の南部に位置する高月地域※は、昭和29年（1954）に3村が合併して高月町となり、昭和30年（1955）には七郷村と、昭和31年（1956）には高時村（昭和29年

（1954）に木之本町と合併）の大字高野と合併を行っている。伊香郡の南東部に位置し、木之本地蔵院の門前町として、また北国街道・北国脇往還の宿場町としてにぎわった木之本地域※は、大正7年（1918）に木之本村が町制に移行し、昭和29年（1954）に1町3村が合併を行っている。伊香郡の北部に位置する余呉地域※は、奈良時代から平安時代にかけて余呉郷・丹生郷・片岡郷の3つを総称して余呉の庄として統治したのが始まりで、昭和29年（1954）に3村が合併して余呉村となり、昭和46年（1971）に町制に移行している。伊香郡の西部に位置し、京都・大阪と北陸地域を結ぶ物流の要衝として栄えた西浅井地域※は、昭和30年（1955）に2村が合併して西浅井村となり、昭和46年（1971）に町制に移行している。

その後、平成18年（2006）2月13日に、長浜市、東浅井郡浅井町、同郡びわ町の1市2町が合併し、平成22年（2010）1月1日に、長浜市、東浅井郡虎姫町、同郡湖北町、伊香郡高月町、同郡木之本町、同郡余呉町及び同郡西浅井町の1市6町が合併し、現在の長浜市が誕生した。現在は人口約120,000人を有する湖北圏域の中心都市として発展している。

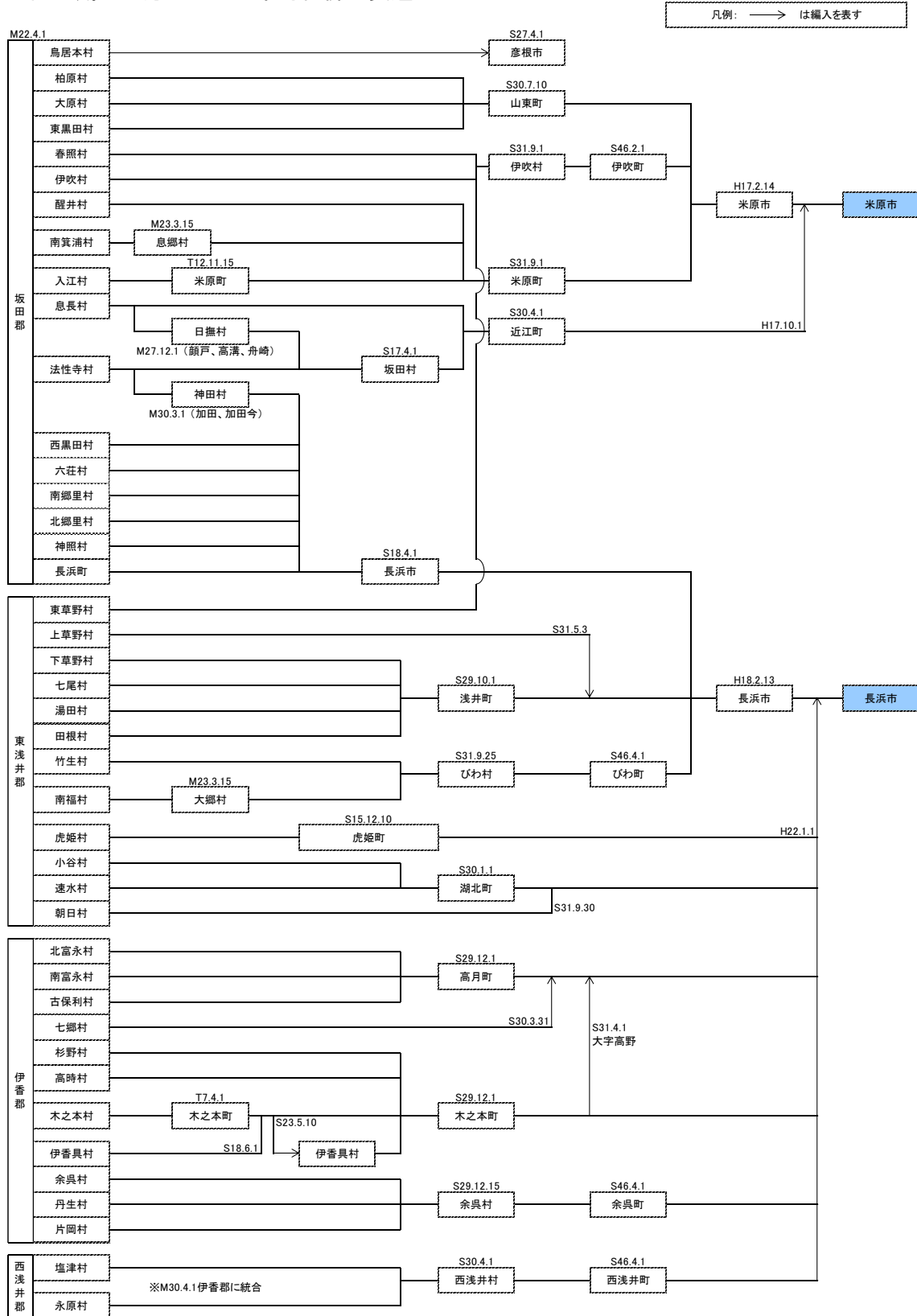


平成18年（2006）合併前の
旧東浅井郡 ■、旧伊香郡 ■

※本計画中における長浜地域、浅井地域、びわ地域、虎姫地域、湖北地域、高月地域、木之本地域、余呉地域、西浅井地域とは、平成18年（2006）の合併前の旧市町域を示すものとする。

第1章 歴史的風致形成の背景

図 湖北地方における市町合併の変遷



参考資料: 滋賀県「滋賀県史 昭和編 第2巻:行政編」(1974)

第1章 歴史的風致形成の背景

(2) 土地利用

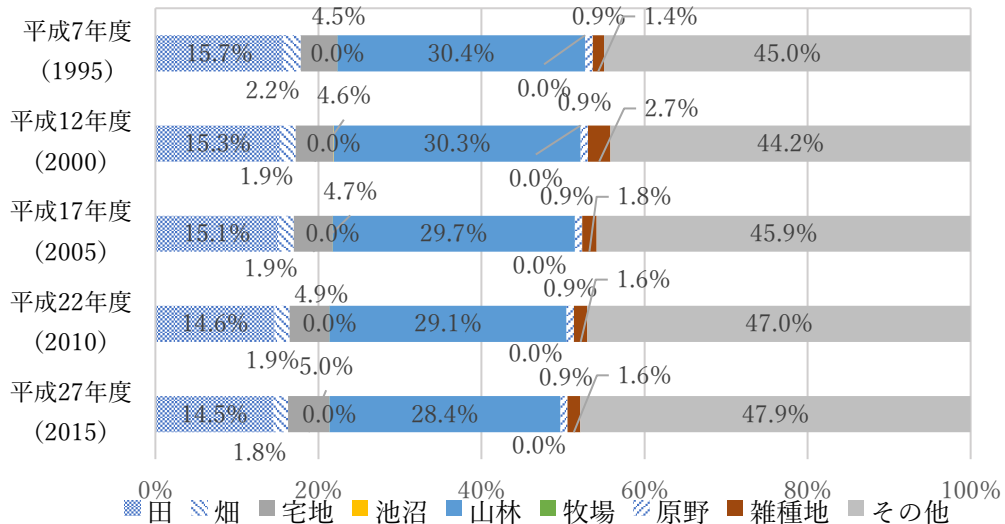
平成7年（1995）から平成27年（2015）の土地利用の面積の推移をみると、田、畑、山林、原野が減少し、宅地と雑種地が増加している。また、割合の推移をみても、田が1.2%、畑が0.4%、山林が2.0%減少、宅地が0.5%増加となっており、自然的な土地利用が減少している。

土地利用面積推移表

（単位：ha）

	田	畑	宅地	池沼	山林	牧場	原野	雑種地	その他
平成7年度 (1995)	8,282	1,157	2,359	12	16,059	0	496	725	23,788
平成12年度 (2000)	8,082	1,025	2,457	10	16,026	0	487	1,440	23,385
平成17年度 (2005)	7,977	1,012	2,514	10	15,715	0	481	945	24,281
平成22年度 (2010)	7,884	1,004	2,623	12	15,692	0	483	888	25,363
平成27年度 (2015)	7,804	986	2,700	15	15,294	0	474	839	25,835

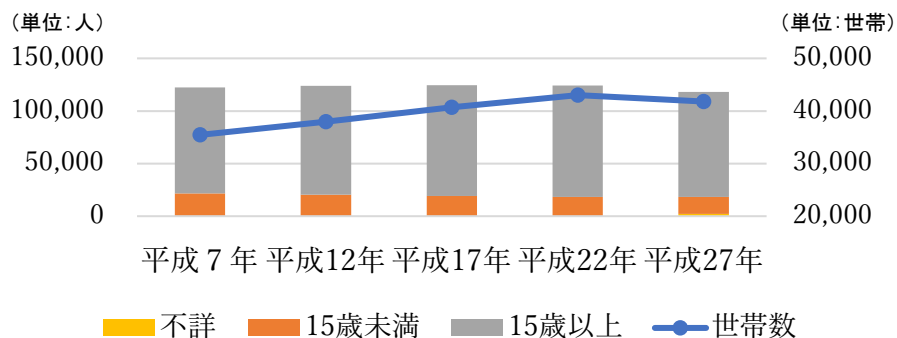
土地利用面積推移グラフ



(3) 人口動態

本市の人口は、平成27年（2015）では118,193人で、平成22年（2005）から大きく減少しており、世帯数は平成27年では41,788世帯で、平成22年から減少に転じている。

土地面積推移表長浜市人口・世帯数 推移グラフ



(4) 交通機関

本市は、京阪神や中京、北陸の経済圏域の結節点としての位置にあり、京都市や名古屋市からはおよそ 60km 圏域、大阪市からはおよそ 100km 圏域にある。古くから東日本と西日本の文化の接点であり、かつ融合地帯であった。

J R 北陸本線・湖西線や北陸自動車道、国道 8 号、国道 303 号、国道 365 号を主な広域交通軸として、これらの経済圏域と利便性高く結びついている。さらに、平成 18 年（2006）10 月に J R 北陸本線・湖西線の電化方式が交流から直流に変更されたことにより、京阪神からの直通列車の運行が可能となり「琵琶湖環状線」として京阪神はもとより、北陸圏域への交通利便性が高まっている。

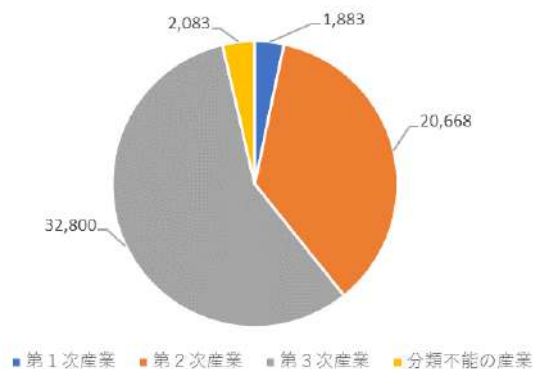
また、北陸新幹線の金沢～敦賀間が令和 6 年（2024）3 月に開通した影響により、関東地方と北陸地方との間で人の移動が増えることで、長浜市とこれらの地域との間で交流が活性化することが期待されている。

図 長浜市の広域交通網



(5) 産業

本市の平成 27 年（2015）国勢調査における産業別就業者数は、就業者 57,434 人のうち、農林水産業など第一次産業は 1,883 人（3.2%）、建設業や各種製造業などの第二次産業は、20,668 人（35.9%）、卸売業・小売業やサービス業などの第三次産業は 32,800 人（57.1%）となっている。

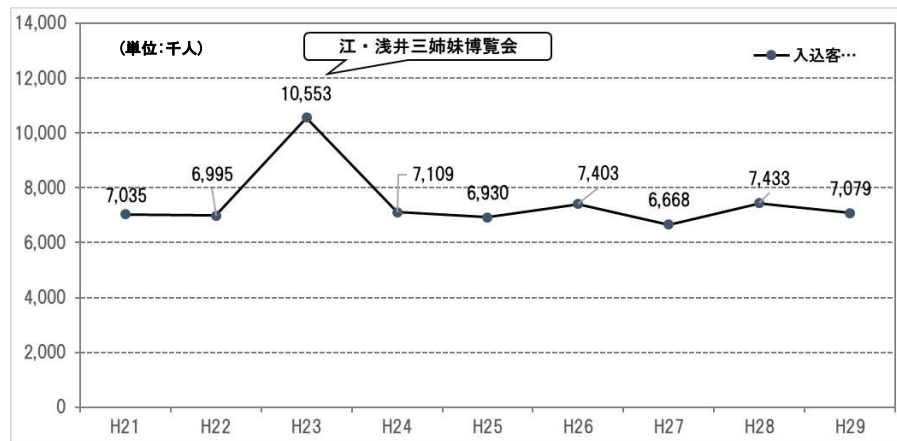


(6) 観光

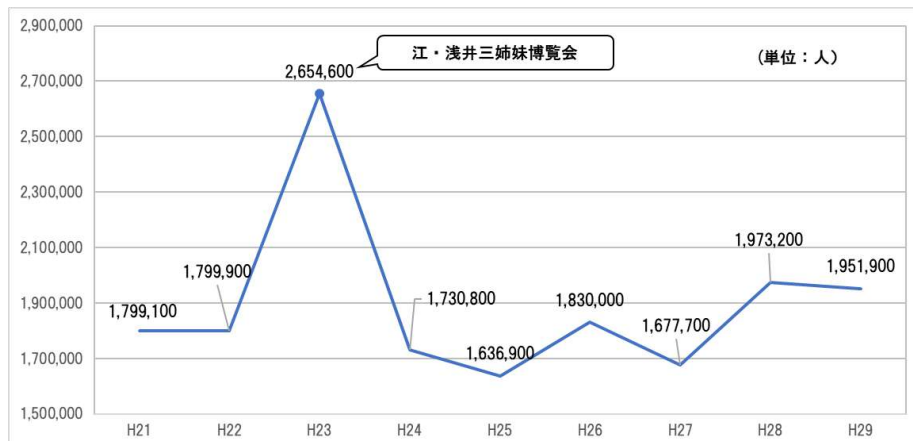
本市は南北 40 km、東西 25 kmと市域が広く、豊かな自然に恵まれ、歴史と伝統が息づくまちである。中心市街地は、戦国時代に羽柴（豊臣）秀吉が築いた城下町を起源として、町衆^{まちしゅう}と呼ばれる住民によって運営されてきた。新しいものを進んで取り入れる「進取の気性」が受け継がれ、黒壁ガラス館本館をはじめとする近代化遺産も多い。また、平安時代から現代にいたるまで、観音信仰が深く、多くの仏像が市内各地に伝わっている。

平成 23 年（2011）には、大河ドラマ「江～姫たちの戦国～」が放送され、放送にあわせて市内で「江・浅井三姉妹博覧会」を開催したところ、多くの観光客が長浜を訪れた。

◆ 観光入込客数の推移



◆ 黒壁スクエア 観光入込客数の推移



3 歴史的環境

本市は、琵琶湖及び琵琶湖に流れる姉川、草野川、高時川、余呉川の豊富な水系によって縄文時代早期に人々の生活が始まって以来、様々な生活相を示しながら生成・発展してきた。

(1) 古代

縄文時代

本市の縄文遺跡の分布については、明確な特徴があり、湖岸の低湿地遺跡と山麓あるいは山地の川沿いに立地するものがある。

本市は「東日本の山の文化と西日本の海の文化」が混在する地域であり、かつ融合地帯と言える。さらに同時に、本市は北陸文化との接点でもあった。

縄文早期末葉の東海系条痕文土器である上ノ山式を含む八反田遺跡、縄文前期前半では集積炉内から北白川下層式が出土した宮司東遺跡、縄文中期から後半ごろでは配石遺構や住居跡などを検出する古橋遺跡、醍醐遺跡、野瀬遺跡、柳町遺跡、金剛寺遺跡、高橋遺跡、縄文後期では住居跡から合せ口甕棺などが出土した川崎遺跡、小堀遺跡、縄文晩期では住居跡、貯蔵穴などとともに滋賀里式や北陸地方の八日市式土器、中部地方を原産とするヒスイ、メノウ、黒曜石を材質とする玉・勾玉が出土する宮司遺跡、川崎遺跡、十里町遺跡、口分田北遺跡、堀部西遺跡などの集落が営まれ、湖岸沿いでは尾上浜遺跡から丸木舟が1隻出土している。出土した丸木舟からは、縄文時代に物資の運搬などに使用していたであろうと推察され、また、漁具とともに出土した例があることから、琵琶湖で漁撈用として使われたことも間違いないと思われる。そして、縄文晩期後半ごろになると湖岸沿いの平野部では新たな文化・技術を持った集落が営まれるようになる。



【醍醐遺跡 縄文土器】



【丸木舟】

弥生時代

滋賀県における最古級の弥生遺跡は、低湿地に営まれた縄文時代から中世まで複合する川崎遺跡である。集落を囲む溝の中から多くの土器、石器とともに鍬類や堅杵の木製品、粃が出土し稲作が営まれた弥生前期の環濠集落遺跡である。その他前期の遺跡として、方形周溝墓を検出する塚町遺跡、宮司東遺跡などがある。弥生中期から後期の環濠集落は鴨田遺跡、大塚遺跡、越前塚遺跡、塚町遺跡、十里町遺跡などがあり、鴨田遺跡では



【川崎遺跡 環濠】

第1章 歴史的風致形成の背景

近畿、北陸、吉備、東海地方の特徴を持つ土器や五珠銭など地方文化の交流を示す遺物や玉杖の原型とも言われる杖頭などが出土している。その他中期から後期の遺跡として方形周溝墓や建物群を検出する五村遺跡、高月南遺跡などがある。弥生後期では、十里町遺跡、列見町遺跡、鴨田遺跡、大塚遺跡、越前塚遺跡、墓立遺跡、五村遺跡、高月南遺跡などがあり、列見町遺跡では方形周溝墓とともに東海地方の特徴を持つパレス形土器や小児用木棺墓が出土し、越前塚遺跡は70基以上の周溝墓や古墳が造られた墓域である。

葛籠尾崎湖底遺跡

琵琶湖北部の葛籠尾崎湖底遺跡は、葛籠尾崎の東沖の水深約10mから約70mに及ぶ湖底にあり、縄文時代から平安時代までの土器や石器などが多数引き上げられている。湖底の深い場所にある遺跡は、日本はもちろんのこと、世界にも例がなく貴重なものである。遺跡がなぜ湖底にあるのかは、いまだ解明されていない。



【葛籠尾崎湖底遺物】

王権から律令へ

本市の古墳の分布は大きく3群に分類できる。のちの郡単位のまとまりをもって一つの系譜を形成している。

1群 坂田郡域

伊吹山系丘陵上に古墳が多く点在する。姉川を源とする長浜平野の東方に位置する横山丘陵から伊吹山麓では、湖北地方最大の前方後円墳・茶臼山古墳が造られ、前方後方墳、円墳、方墳が連立する長浜古墳群を形成している。

2群 浅井郡域

草野川及び高時川を源とする湖北平野に古墳群が形成されている。古墳時代前期の丸山古墳や古墳時代中期から後期の雲雀山古墳群などがある。

3群 伊香郡域

高時川を源とする高月平野及び余呉川流域に古墳群が形成されている。古墳時代前期初頭から後期までの前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳が連立する国内有数の古保利古墳群や古墳時代中期を中心とする物部古墳群、涌出山古墳群、長山古墳群、長野古墳群がある。



【古保利古墳群】

長浜市は坂田郡、浅井郡、伊香郡の3郡からなる。

・坂田郡にあった9郷

上坂郷、下坂郷、阿那郷、細江郷、大原郷、長岡郷、朝妻郷、上丹郷、駅家郷
坂田郡9郷のうち、上坂郷、下坂郷、阿那郷、細江郷の4郷が長浜市であり、それ以外はすべて米原市である。

第1章 歴史的風致形成の背景

・浅井郡にあった14郷

岡本郷、田根郷、湯次郷、大井郷、川道郷、丁野郷、錦部郷、速水郷、益田郷、新居郷、都宇郷、朝日郷、浅井郷、草野郷

・伊香郡にあった9郷

柏原郷、安曇郷、楊野郷、伊香古郷、余呉郷、片岡郷、丹生郷、塩津郷、大浦郷

寺院の分布は長浜平野に見られ、白鳳寺院として山田寺式の瓦が出土した大東廃寺、新庄馬場廃寺、八島廃寺や新羅系氏族の古代寺院柿田廃寺などが建立された。

地方官衛として坂田郡衛跡には宮司遺跡、大東遺跡がある。第1次郡衛は7世紀後半から8世紀前半の建物跡が見つかった大東遺跡、第2次郡衛は8世紀中ごろの建物跡が見つかった宮司遺跡がある。全容は明らかでないが、遺跡からは掘立建物跡、井戸跡、須恵器、土師器、灰釉陶器などが出土している。

(2) 中世

中世の土豪と城

中世の湖北は佐々木氏、六角氏の統治から、在地の土豪であった浅井氏が統治し、戦国時代に羽柴（豊臣）秀吉が湖北三郡を支配した。これらの土豪（在地領主）は、農村、山村、漁村などの生産世界に生活の本拠地としての城館を持ち、在地民の生産活動に対して強い指導性を持っていた。

小谷城跡

小谷城跡は、小谷山一帯の尾根筋や谷筋をそのまま活用した南北に長い山城で、築城当時は現在の本丸跡よりさらに北に位置する大嶽城おおつく付近に本丸があったと考えられている。浅井久政、長政によって代々拡張が重ねられ、現在の城郭になった。落城後、長浜城の建築資材とするため小谷城は解体されたが、山王丸付近に現存する大石垣を見る限り当時としては先進的で大規模な城であったと推察される。城は多くの郭によって構成されており、本丸とその奥に続く中丸との間には深さ5～10mほどの堀切があり、主として南北2つの部分に分けることができる。また、清水谷や城下町の一部には重臣の屋敷が配置されていた。



【小谷城跡】

横山城跡

横山城跡は、本市の南東部の横山丘陵上に位置する戦国時代から中世末の山城と砦の遺跡である。尾根上に分布する砦の多くは古墳（横山古墳群）を利用して造られている。交通の要所に造られており、東に伊吹山、西に琵琶湖、北には小谷城が見え、眼下には北国脇往還が走っている。元亀元年（1570）、姉川合戦がおこり、合戦のあと、羽柴秀吉が城番として3年間横山城を預かり、天正元年（1573）の小谷城攻めに際しては、信長軍の拠点となった。同時に、秀吉が城持ち大名として江北を領有し、さらに長浜城主へと出世していくきっかけとなった城でもある。Y字型に連なる頂上部の尾根を中心に北城、南城

第1章 歴史的風致形成の背景

が築かれ、東西南北に延びる各尾根や各谷沿いに城の縄張を構成する郭のほか、姉川・小谷城合戦の際に造られた多数の砦が残っている。

在地の居館（館跡）

湖北地方の在地居館群は平野部を中心にほぼ集落内に一つの割合で分布していることが挙げられる。他地域の城館は比較的山間に分布するのに対し、本市では平野部に集中していることが特徴で、これは立地条件の違いなども考えられるが、本市の平野部の村落内に防衛と居住の機能が一体化した在地居館を築く必要性があったと考えられている。

南北朝時代から戦国時代にかけて、国人領主である京極氏の upper 寺城、浅井氏の小谷城を頂点に各地に城館を構える家臣団の山城・詰城が認められず、横山城や鳥羽上城など点する山城は、あくまでも京極氏、浅井氏の山城である。湖北の在地居館は、農民支配の方策として村内又は近隣に在地居館を築くことで、高い生産性を背景に多くの土地を集積する地主として水利権を掌握し、村々の法秩序を作り荘園の代官として年貢を収納するなど、潜在的に領主に対抗する力を持つ農民層を支配したと言われている。本市の在地領主の平地居館跡として北近江城館跡群（下坂氏館跡、三田村氏館跡）（国史跡）、高田氏館跡、垣見氏館跡、上坂氏館跡、大東館跡、東野氏館跡、小山氏館跡が現存している。



【下坂氏館跡屋敷】

戦国古戦場跡

姉川古戦場跡

元亀元年（1570）、浅井長政・朝倉景健の連合軍と、織田信長・徳川家康の連合軍が、本市に流れる姉川の兩岸で壮絶な合戦を繰り広げた。その戦いから浅井長政は信長軍の総攻撃を受け、その3年後の天正元年（1573）、小谷城において自刃している。



【姉川古戦場跡】

賤ヶ岳古戦場跡

賤ヶ岳の合戦は、天正11年（1583）、近江国伊香郡（余呉地域、木之本地域）の賤ヶ岳付近で行われた羽柴秀吉と柴田勝家との戦いである。信長の後継者をめぐる激しい戦いとなり、秀吉はこの戦いに勝利することによって織田信長の作り上げた権力と体制の継承者となることを決定づけた戦いである。賤ヶ岳付近では両軍の壮烈な戦いが繰り広げられ、賤ヶ岳には戦跡碑や戦没者の碑が建てられている。



【賤ヶ岳山頂の戦跡碑】

また余呉町池原にある全長寺^{ぜんちやうじ}周辺も合戦の地となり、全長寺は賤ヶ岳の合戦で亡くなった多くの戦士の霊を供養し続けている。

(3) 近世

水に浮かぶ城・長浜城の築城

天正元年（1573）、小谷城本丸を織田信長自身が攻撃し、浅井長政はこれを支えきれず、自害した。ここに、湖北において50有余年にわたって覇をとなえた戦国大名浅井氏が滅亡した。信長は、浅井攻めに最も功績のあった羽柴秀吉に、北近江の浅井遺領、すなわち坂田・浅井・伊香三郡の大部分を与えて支配させた。これは秀吉にとって大変名誉なことであり、一躍、湖北三郡を領する大名となり、はじめて一国一城の主となった。小谷城は落城の際に焼失しなかったため、秀吉はそのまま入城した。

その後、秀吉は、天正2年（1574）ごろから、小谷山南西の湖岸沿いにある「今浜」に築城を開始する。秀吉はこの「今浜」という地名を「長浜」に改めた。この地に城を築いた理由は、湖岸の今浜が、軍事・商工業等の物資輸送で湖上交通を利用しやすいこと、中山道に近く、北国街道に通じる陸上交通の要衝であること、姉川南岸に居住した国友鉄砲鍛冶を掌握し支配を強化しやすいこと、平野であるため城下町造成がしやすいことなどによるとされている。

秀吉の長浜城築城については、絵図面や縄張図も現存せず、関係する数点の古文書が伝来するだけで、不明の部分が多い。ただし、現存する古絵図や発掘調査などから、三重の堀で本丸を守り、三層程度の天守が湖岸にそびえていたものと推定される。長浜城の城主は、秀吉以降、柴田勝豊、山内一豊、内藤信成・信正と代わり、城主がいないときは代官が置かれた。

近世城下町のルーツ・長浜

秀吉が造成した長浜城下町の町割を詳細に検討すると、町通りが長浜城に対して縦に走り、この通り（東西通り）に間口を開く「縦町」が、城郭に平行している「横町」の通り（南北通り）よりも優先しており、近世城下町のルーツとされている。

城下町の成立過程については、天正8年（1580）の「血判阿弥陀如来像」や天正9年（1581）の『羽柴於次秀勝判物』、さらに幕末・元治元年（1864）の『長浜町切絵図』等の史料から考察することができる。その成立は、まず初めに城下町の根幹をなす「大手町」や東・西の「本町」、東・中・西の「魚屋町」などの縦町が成立した。その後天正8年（1580）ごろまでに小谷城下から移住させられた人々による「伊部町」や「呉服町」、「大谷市場町」や「鍛冶屋町」が空閑地であった横町を埋める形でつくられ、長浜城下町のほぼ中心部が成立したと考えられている。

また、長浜城は三重の堀で防御する構造を持っていたが、これを防衛用や軍港の用途だけではなく、商業への利用も視野に入れてつくられた。幅15間もあった外堀を利用して、当初から商業用の港と船持・船頭・水主等の集住する町が造成された。また、町家の前や背面には水路が走り、米川等を利用して住宅のすぐ側まで小舟が乗り入れられる構造であり、琵琶湖の舟運と城下町を直結した町建てであった。

さらに、舟運業者の「船町」、鍛冶の集まる「鍛冶屋町」、魚を商う「魚屋町」、呉服商の多い「呉服町」、藍染屋の「紺屋町」、金属加工業者の「金屋町」、鉄砲鍛冶の集住した「鉄砲町」、刀鍛冶等の御用鍛冶の「鞆町」、農民の居住した「田町」など、商工業

者を中心に様々な職種の町民が集まって城下町が構成されている点も大きな特徴である。

このように、①街路の両側に間口を開く長方形の町家を1セットとし、何列もこのセットの町家を並べるプランと、②湊と舟運重視の町建て、③ブロックごとに商人・職人が集住する町割りが、近世城下町の雛形となっていく。秀吉は、城下町建設を通して、権力の形成と力の誇示を図り、求心性を高めていった。

秀吉の城下町施策

今浜に城を築いた秀吉は、小谷城下の商人や寺院を今浜に移して城下町としての礎を築き、今浜の地名を「長浜」に改称する。

城下町の町衆に対する秀吉の施策については、小野晃嗣『近世城下町の研究 増補版』（1993）や小島道裕『城と城下』（1997）に詳しく記載されている。秀吉は初期の段階から、長浜町衆への年貢米と諸役を免除している。これは強制移住させられた町衆の人心収攬を図り、新造城下町を安定させるための優遇政策と考えられる。またこの政策は、楽市楽座令の一環と考えられ、秀吉の商業優先政策をよくうかがうことができる。

しかし一方で、湖北地方における浄土真宗の根強い基盤を背景に、信長と戦う石山本願寺から長浜の町衆や町年寄、寺院に対し、軍資金や鉄砲隊の調達などの指令が相次いで出されている。これに対し秀吉は、町衆や門徒への弾圧や圧政、転宗等を全く行っていない。これは、秀吉が湖北・長浜の民衆をいかに大切にしたいかという表れであると考えられる。なお、信長と本願寺の抗争中に、長浜町衆の門徒は、秀吉に隠れて常に長浜町内の某所に集まり、本願寺支援の密議を謀った。これを「総会所」と称していたが、後年これが長浜町内の「大通寺」に拡大発展していった。

その後、天正19年（1591）に、秀吉は町屋敷の年貢米三百石を免除する朱印状を与えた。この朱印状は、賤ヶ岳の合戦の際に長浜町衆が秀吉軍に従軍し、兵糧・弾薬の運搬や戦闘にまで参陣した結果、その恩賞として与えられたものである。年貢米免除の特例は、長浜を除くと京都・大阪・大和郡山しか与えられておらず、いかに秀吉が長浜の町衆を保護し、自由な商業と流通活動の促進を図ったかを知ることができる。

さらに、長浜町は52の個別町により構成され、各個別町ごとに「町代」（代表者）を中心とする町役人組織を持ち、町の掟をもつ自治組織として運営されていた。個別町の上部には、その連合体である10の町組の組織があり、その代表者は「長浜町年寄十人衆」と呼ばれ、自分たちの手で町を動かす町衆自治の基礎となっていた。



【長浜町絵図 今村本（江戸時代初期）】
個人蔵

長浜町を描いた現存する最古の絵図。赤色の線より内側が町屋敷年貢米三百石免除の朱印地を表している。



図 天正時代初期の長浜城下町推定図（長浜城歴史博物館作成）

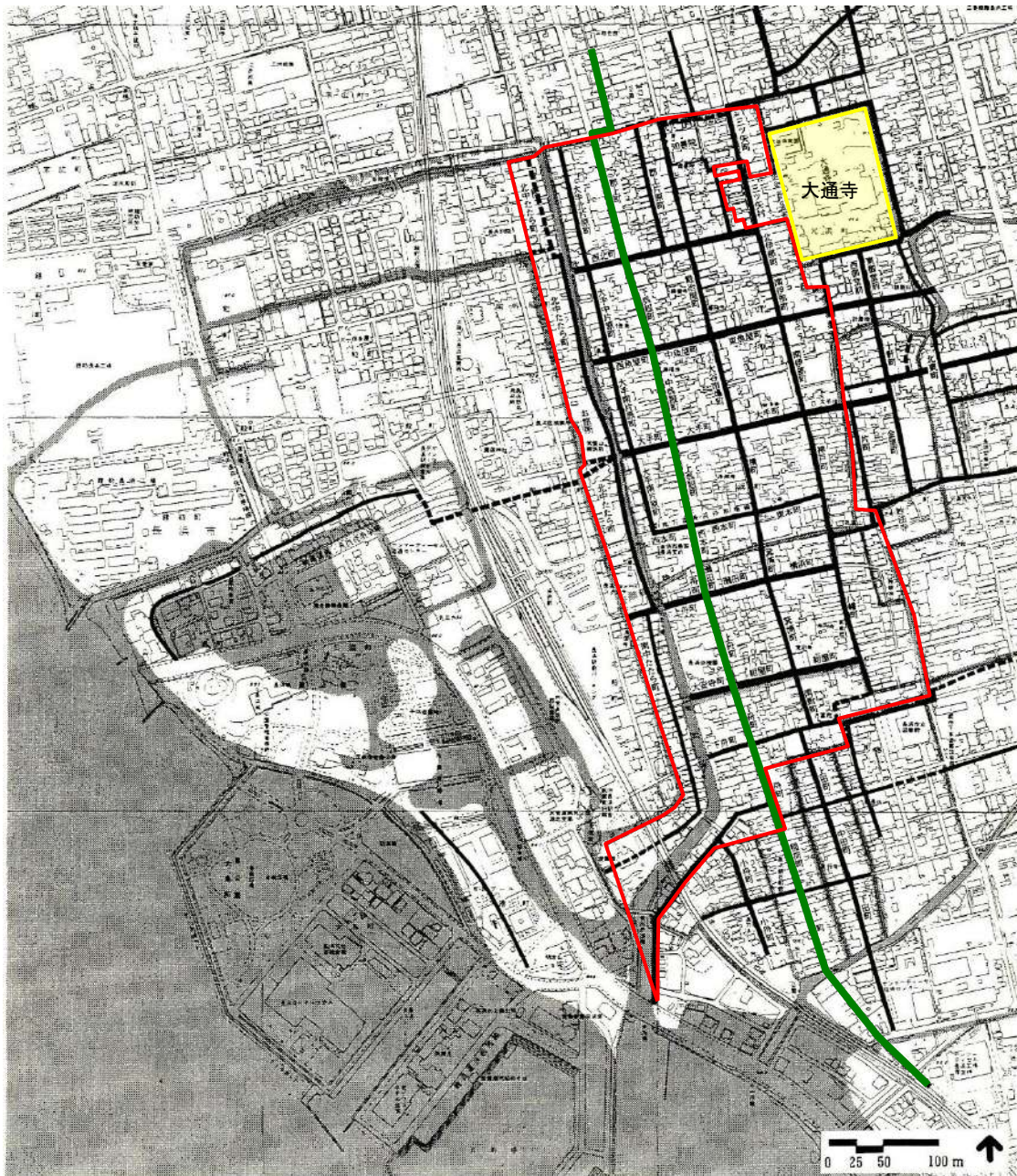


図 旧長浜町町割復原図（長浜市教育委員会作成）

※現都市計画図に下記の情報を入力したもの。当時の町割りがほぼ現在の主要道路と一致することがわかる。

	水面	（主に明治6年以後の地券図の地形）
	道路	（前頁の長浜町絵図による）
	後の北国街道	
	町屋敷年貢米三百石免除の朱印地	

城なき城下町の発展

元和元年（1615）に大坂城が落城し豊臣家が滅亡すると、一国一城令により時の長浜城主内藤信正は摂津高槻へ転封となり、長浜城は廃城となった。これにより、長浜城の建築物や石垣の多くは彦根城に運ばれ、敷地も農耕地として利用され、長浜城の縄張は徹底的に破壊された。長浜城の旧領は、彦根の井伊直孝に与えられ、以降、江戸時代を通じて、長浜町は彦根藩領として推移する。

彦根藩は、秀吉時代の町屋敷年貢米三百石免除の特権を継続して認め、長浜町を領内の中心的商業都市として位置付け、町人町としての発展を企図した。また、町年寄十人衆の家筋から選定された町年寄三人が町全体の行政を担った。こうした政策に支持された結果、江戸時代の長浜は、町運営のほとんどを町人が担う自治の町として大いに繁栄した。元禄8年（1695）の『大洞弁財天祠堂金寄進帳』^{おおほらべんざいてん しどうきん きしんちょう}によれば、江戸時代の長浜町の家数は1,000～1,300軒、人口4,600～4,900人であったと推定されている。

今に残る町割りと町家、背割り水路、井戸組

旧長浜町の区域では、江戸時代初期の町割りと現在の主要道路がほぼ一致しており、碁盤目状に区画された道路に面して、両側に整然と町家が建ち並んでいる形態を見ることが出来る。明治5年（1872）の大火をまぬがれた北国街道沿いをはじめ、各所には江戸時代の建築様式を受け継いだ町家が多く点在、あるいは軒を並べている。その主屋の構造形式は切妻造、平入、瓦葺がほとんどである。町家は道に面して主屋が建ち、奥行が深い場合は、その背後に庭を介して付属屋を設けている例が多い。2階部分は軒が低く、天井を張らない屋根裏が物置として使用されていた。明治期になると、この2階に天井の低い居室が設けられるようになった。

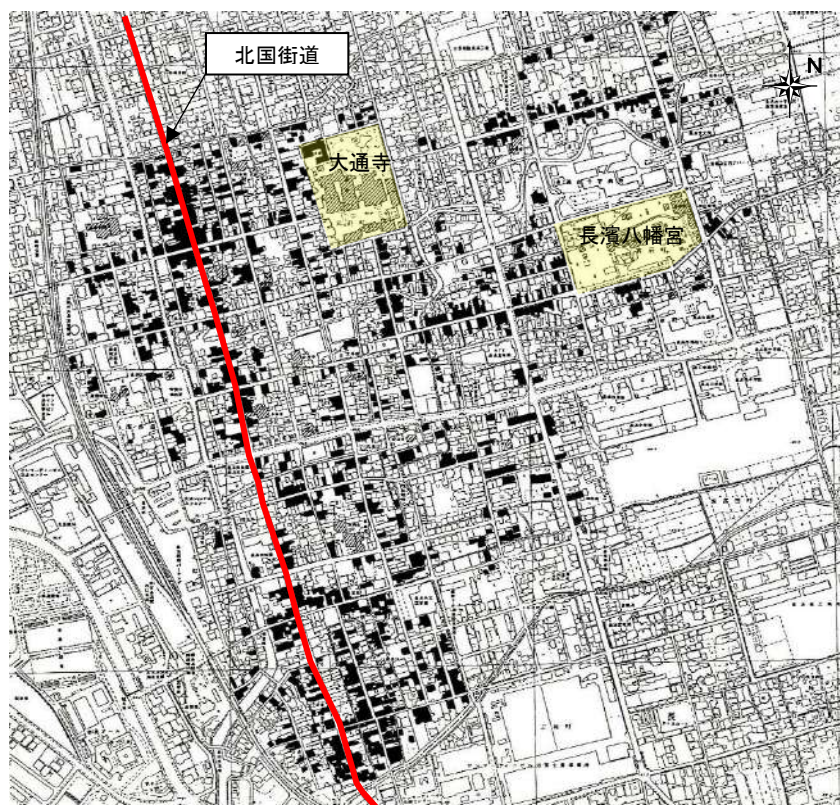


図 伝統的町家の分布（長浜市伝統的建造物群保存対策調査報告書 平成7年）

第1章 歴史的風致形成の背景



【町家の一例】



【町家の中庭】

また、今に残る整然とした町割りのなかを、米川の本流や支流、またかつての長浜城外堀など、大小の河川や水路が縫うように流れている。旧長浜町の町割りは背割りを基本としているが、この背割りに河川や水路が流れていることが多い。背割り水路（河川）の両側には石積みが施され、主屋の裏手に配された蔵や離れ座敷等がここに建ち並び、水路に降りる石段とともに、表通りとは趣きを異にしている。



【石積みが施された米川の流れ】

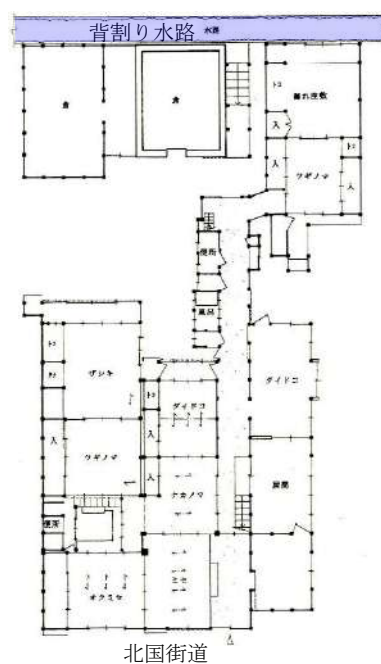


図 町家平面図

(長浜市伝統的建造物群保存対策調査報告書 平成7年)

さらに、旧長浜町には、江戸時代以来の伝統的な上水利用の形態として、井戸（親井戸）を水源として親井戸ごとに井戸組（池組、池仲間）を組織し、各戸の水槽（子井戸）へ給水する方式がとられていた。この井戸組は古くは32組あり、中には深度80m以上の親井戸や50以上の子井戸に給水可能な親井戸も存在した。こうした井戸組による上水利用は、近代上水道が完備した今日でも3分の1近くが現存し、良質の上水を提供している。



【井戸組の子井戸】

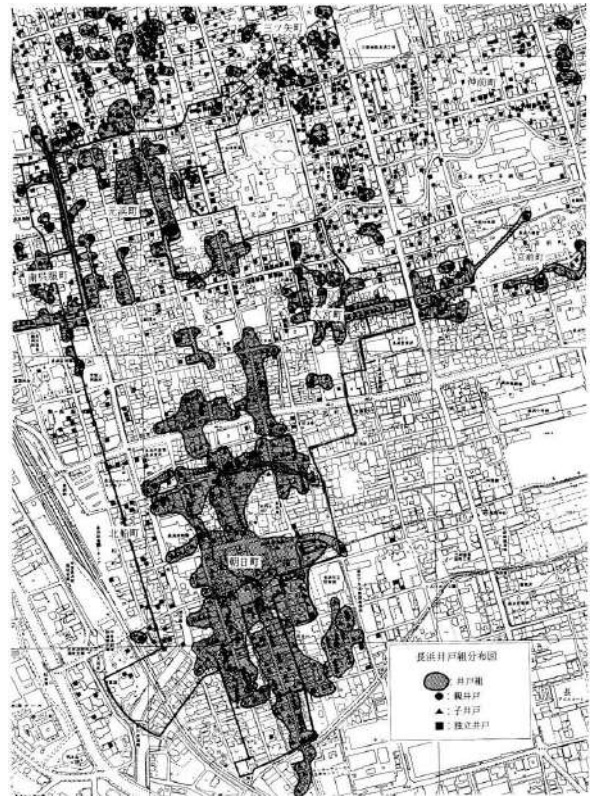


図 長浜井戸組分布図
(長浜市伝統的建造物群保存対策調査報告書 平成7年)

北国街道・北国脇往還とその宿場町

湖北地方の幹線道路としては、北国街道と北国脇往還があった。

北国街道は、近畿と北陸を結ぶ街道であり、中山道鳥居本宿の北のはずれ、現在の彦根市下矢倉町において中山道から分岐し、米原宿（米原市）・長浜町・木之本宿、さらには余呉町柳ヶ瀬・余呉町椿坂・余呉町中河内（以上長浜市）を経て越前の板取宿、今庄宿（以上福井県）へ出て北国へ至る街道である。

北国街道の米原、長浜、木之本の間は、もともと大名の参勤交代の通路ではなかった。しかし、幕末期には政治的動乱により、近畿、特に京都の重要性が増し、北陸大名やその関係者が京都、大坂へたびたび出かけるようになり、北国街道の米原、木之本間においてもこのための通行が激増した。長浜はそのための人馬継立てに追われ、本陣もそれまでほとんどなかった北陸大名関係の休息・宿泊をたびたび引き受けるようになった。



【現在の北国街道】

なお、北国街道の米原、長浜には彦根藩の主要湊があり、この二湊に彦根の松原湊を加え、彦根三湊と称した。一方、早崎湊や尾上湊に出る道も開けており、北国街道の木之本以南の部分は琵琶湖の湖上交通との結びつきの強い街道でもあった。また、北国街道の長浜からは北国脇往還の春照宿を経て関ヶ原へ通じる道路が開けており、重要な物資輸送路としての役割を果たしていた。

一方、北国脇往還は、東海と北陸を結ぶ街道であり、北国街道の木之本宿から分岐して小谷宿（伊部・郡上宿）（長浜市）・春照宿・藤川宿（以上米原市）を経て中山道の関ヶ原宿（岐阜県）へ通じていた。「北国脇往還」という呼び名は明治以降のことで、それまでは北国海道、越前路、北国道などと呼ばれ、北陸と東海・関東を結ぶ最短路として、昔から多くの旅人や荷物が行き交った。

また北国脇往還は交通の要衝であったことから、古代では壬申の乱、戦国時代には姉川合戦、小谷城合戦や賤ヶ岳合戦などの舞台となり、街道沿いに残る史跡や碑、地名などに当時を偲ぶことができる。

小谷宿は小谷城の城下町として発達した宿で、天正元年(1573) 9月小谷城落城後、羽柴秀吉によって城下町は長浜に移されたが、宿駅機能は残っていた。伊部宿と郡上宿の二宿一駅の形態がとられ、合わせて小谷宿と呼ばれていた。伊部宿は上りで上小谷宿として本陣と問屋が、郡上宿は下りで下小谷宿として脇本陣が問屋を兼務しており、小谷宿は北陸諸般の大名の定宿にもなっていた。

北国脇往還及び北国街道の木之本以北の部分は、北陸の大名の参勤交代の通路として用いられていた。例えば椿坂宿の記録には通行した大名として福井藩、鯖江藩、丸岡藩、大野藩、勝山藩（以上福井県）などがあげられている。

また、天正11年(1583)の羽柴軍と柴田軍による賤ヶ岳合戦では、羽柴秀吉が一時戦線を離れ美濃大垣にいた際、柴田軍の奇襲を受け大岩山が落城し、守将中川清秀が討死にした。その知らせを受けた羽柴秀吉は、すぐさま全軍を引き返し、大垣から木之本までの十三里(52km)の行程を5時間で駆け抜けたと言われており、これを「秀吉の大返し」という。そのときの様子を記した『天正記』や『賤ヶ岳合戦記』によると、このとき、秀吉が通った経路が後の北国脇往還であると考えられている。

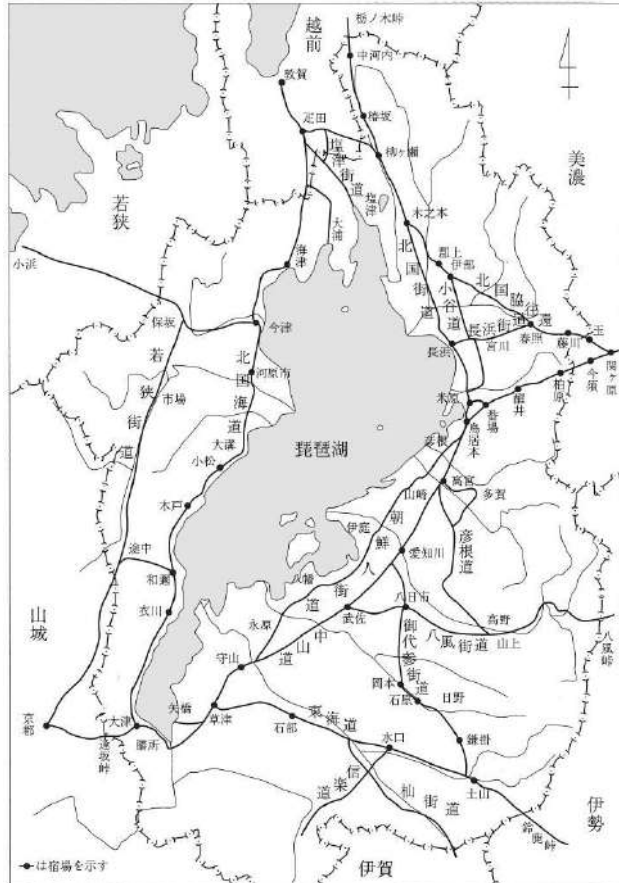


図 近世近江の陸上交通図

長浜湊の湖上交通

長浜湊は、古くは秀吉の城下町建設にともない外港として整備されたといわれ、廃城後も北国街道と琵琶湖水運をつなぐ湊であった。彦根藩成立後、問屋・舟持・水主・船大工などが居住し、彦根領内の年貢米を輸送する中継地となって、坂田・浅井・伊香三郡および北国街道・長浜街道を経由する米穀や諸物資が船積みされる湖北の中心港となっていた。

琵琶湖からの船は、かつての長浜城外堀へ続く米川河口から入り、堀を通して船町などで荷下ろし、荷積みを行い、米川両岸一帯は船着き場として使われていた。現在でも船町付近の米川岸には蔵や石垣などが残る箇所があり、船着き場だったころの面影が残っている。



【米川河口の船着き場（昭和30年代）】
「長浜市史第7巻 地域文化財」より転載

塩津街道と丸子船

古くから人々は琵琶湖で漁を営み、またその水運を利用した湖上交通や湖上輸送を盛んに行ってきた。中でも、奥琵琶湖と呼ばれる琵琶湖の最北端にあたる一帯は、日本海と畿内を結ぶ結節点にあったことから港を中心とした集落が栄え、西浅井町大浦、塩津（西浅井町塩津浜の旧名）、海津（高島市）は湖北三湊と呼ばれていた。特に塩津は日本海の要港・敦賀（福井県）との距離が約24kmと最短経路であったため、多くの人や物が行き交い、塩津港は「南の大津」「北の塩津」と並び称されるほどの大きな港であり、このとき利用されていた敦賀から塩津までの経路が塩津街道である。塩津街道は、江戸時代には「上り千頭、下り千頭」といわれるほどにぎわい、馬や荷車、商人や旅人の往来が絶えず、大きな問屋や旅館が軒を連ねていた。



【塩津街道の町並み】

また、江戸時代初期には丸子船が見られるようになり、琵琶湖の旅客や貨物輸送の主役として活躍した。丸子船は、二つ割りにした丸太を胴の両側につけた琵琶湖独特の帆船であり、江戸時代の最盛期には塩津で約130隻が保有されていた。現在も2隻の丸子船が現存し、また、かつて庄屋であった民家、常夜灯など、往時を偲ばせるものが残っている。

国友鉄砲鍛冶集団の活躍

近世の胎動過程で堺と並ぶ火縄銃の二大生産地の一つとして重要な役割を担った国友鉄砲鍛冶は、戦国大名浅井氏や羽柴秀吉などに保護されながら、鉄砲の量産体制を拡大していった。しかしながら、戦いの途絶えた江戸時代中期以降は需要が激減し、さらに幕末には幕府の緊縮財政の影響もあり、国友鍛冶は江戸幕府鉄砲玉薬奉行の配下に属し、また各地の大名家に出入りしながらも、自ら活路を見出さねばならなくなった。そのようななかで、銃身に施した象嵌の技術は長浜曳山祭の曳山の飾り金具の金工を育み、また、火薬の製造・調合の技術は花火づくりに活かされるなど、国友鍛冶はその高い技術を残していった。

(4) 近代・現代

秀吉以来、城下町、門前町、宿場町、港町として湖北地方の中核たる都市機能を担ってきた長浜は、浜縮緬などの繊維産業により蓄積された富力があり、同時に、その経済力は町衆自治の気風を育みながら、進取の気性が受け継がれてきた。明治時代に入ると、県下で最初の小学校や国立銀行がつくられたり、わが国で3番目の官営鉄道建設が進められるなど、長浜の町衆は、文字どおり進取の気性で文明開化を先取りしてきた。

町衆自治を支えた繊維産業と経済的發展

江戸時代には、姉川流域を中心として養蚕業が盛んになり、豊富に生産される良質の生糸（浜糸）を原料とした浜縮緬や浜ビロード（天鵝絨）、そして浜蚊帳などの生産は、長浜を代表する地場産業であり、江戸期から昭和期にいたるまで長浜の経済的發展を支えた基盤の一つであった。

なかでも浜縮緬は、手織機から力織機に変わり量産体制となり、昭和47年（1972）には1,854,025反の生産を記録し、ピークを示すことになる。また、ビロードも長浜の代表的な地場産業の一つであり、ビロードを材料として作られる花緒は、全国市場において大きなシェア（約70%）を占め、花緒の見本市が市内で開催されるほど盛況を極めた時期もあった。

こうした活発な繊維産業により蓄積された経済力は、長浜曳山祭に代表される町衆文化を大きく育て、さらに他に先駆けて新しいものを取り入れるという町衆たちの進取の気性を育み、産業、教育、文化、福祉など幅広い分野で近代化が進められた。



【浜縮緬】



【浜ビロード】



【花緒】

時代を見つめ続けた伝統の学舎

開知学校は、本来の位置から移設されたものであるが、駅前シンボルロードと北国街道の交差点に建つ白い擬洋風の建物である。明治4年（1871）、長浜に県下初の「滋賀県第一小学校」が誕生し、明治7年（1874）に建てられた学舎が「開知学校」と改称された。建設費の85%が長浜町民の寄附によってまかなわれており、近代化に熱心な町民たちの誇りであり、経済的な実力の裏付けでもあった。八角形の櫓をもつモダンな3階建てで、時を告げる大太鼓が備えられていた。町衆たちの進取の気性を代表する歴史的建築物である。



【長浜旧開知学校】

湖北路に陸蒸気の汽笛が響く

「日本海と太平洋を結べ!」。長浜は明治維新政府が国運をかけた鉄道のまちであった。当時の長浜町民は、政府に対して「ステーション設置願い」を出し、駅の誘致に熱心に取り組んだ。これにより、明治15年（1882）に国内で7番目に鉄道（長浜・敦賀間の一部）が開通し、長浜は鉄道のまちとして大いに賑わった。

なお、旧長浜駅舎は、国内に現存する最古の駅舎である。レンガを使った外観、鹿鳴館を思わせる内部が往時を偲ばせる。平成18年（2006）には、これをモチーフにしたノスタルジックなデザインの5代目長浜駅舎が開業し、湖北の玄関口として重要な都市機能を担っている。



【旧長浜駅舎と蒸気機関車（明治末期）】
「長浜市史第7巻 地域文化財」より転載

鉄道と湖上交通の結節

江戸時代中期以降、次第に衰退していった長浜湊は、鉄道と湖上交通の接点となる明治前期から再び賑わいを見せる。明治15年（1882）の鉄道の開業に合わせて太湖汽船株式会社が設立され、大津・長浜間の鉄道が開業するまでの代用として蒸気船の運航が始まった。このころ、太湖汽船株式会社の設立にかかわった浅見又蔵が明治13年（1880）に築港工事の許可を滋賀県に求めている。浅見は現在の慶雲館の西側に新



【長浜湊の汽船（明治末期）】
「写真集・長浜百年」より転載

第1章 歴史的風致形成の背景

しい港を造り、蒸気船の接岸を可能にするための浚渫^{しゅんせつ}と開削を願い出た。長浜港は明治16年（1883）に竣工し、翌年には鉄道局によって買い上げられた。以来80年以上のあいだ、長浜港は長浜の湖側の玄関口であった。

東海道線の全通による鉄道連絡船廃止（明治22年（1889））以降になると、長浜港は、琵琶湖観光の遊覧船の発着港として、あるいは湖北・湖西一帯からの丸子船などによる物資輸送の集散港として存続することになった。鉄道からの貨客を失ったものの、従来の湖上輸送貨物は依然として多く、明治40年（1907）の乗客数は大津に次いで琵琶湖第2位の港であった。

下郷共済会と鍾秀館^{しもごう しょうしゅうかん}

大正デモクラシーの時代精神を受け継ぐ一般財団法人下郷共済会^{しもごう}の活動は、大正から昭和初期にかけて、長浜の教育・文化・福祉の振興に大きな影響を与えた。財団設立者の下郷伝平は地元出身の実業家であり、初代が貴族院議員、二代目が長浜町長を務めるなどした。事業で得た利益は社会に還元すべきという理想のもと、長浜初の図書館であり、講演会用の講堂を備えた「下郷共済会文庫」や、秀吉朱印状をはじめとする古文書や美術品等を収蔵した県下初の私設博物館「鍾秀館^{しょうしゅうかん}」を開館し、さらに貧困者の救済や育英奨学金の給付を行うなど、長浜の発展の大きな力となった。

よみがえった黒壁ガラス館

明治33年（1900）に建築された第三百三十銀行長浜支店は、当時は珍しい黒漆喰で土蔵づくりの洋館であり、市民から「黒壁銀行」「大手の黒壁」として親しまれていた。この建物が取り壊されようとしたとき、もう一度これに命を吹き込み、その力によってもう一度長浜のまちを再興させようと市民有志が立ち上がり、昭和63年（1988）4月、第3セクター「株式会社黒壁」が産声をあげた。



【黒壁ガラス館本館】

平成元年（1989）に「黒壁ガラス館本館」としてよみがえったこの建物は、ガラスを中心とした事業展開によって飛躍的な成長を遂げ、中心市街地活性化のシンボルとなっている。古いものを活かしながら新しいものを取り入れるという町衆たちの進取の気性は、現在のまちづくりに脈々と受け継がれている。

今日の中心市街地活性化

昭和に入ってから商店街の近代化にいち早く取り組み、当時は大変な活況ぶりを見せていたが、歴史ある建造物が看板建築等で覆われるなど地域資産が不遇を受ける時期があり、さらに車社会の進展等により市域が拡散し、大型商業資本の郊外進出により中心市街地は往時の賑わいを失うようになった。このようななか、昭和50年代後半から、市民と行政が一丸となって長浜ならではの歴史や文化を感じられる町並みづくりや

第1章 歴史的風致形成の背景

魅力あるイベントの開催に取り組んだ。これがまち全体へと波及し、今では年間約 200 万人の来街者が訪れる町へと生まれ変わった。

(5) まとめ

以上のように、本市は古来より北国街道や北国脇往還の宿場町、琵琶湖の湖上交通や湖上輸送の拠点となった港町として多くの人と物が行き交い、栄えてきた。特に、本市の中心市街地は天正時代のはじめに羽柴（豊臣）秀吉が城下町としての礎を築き、当時としては画期的な町割りによる都市計画を導入し、また町屋敷年貢米三百石免除により自由活発な商工業の振興と流通の促進を図った結果、町衆とよばれる長浜町民の手による自治のもと、経済基盤の整備された商工業都市として発展した。城下町として存在した期間は比較的短かったが、その後も大通寺や長濱八幡宮の門前町として、あるいは北国街道の宿場町や長浜湊の港町として、さらには明治の文明開化を進んで取り入れた近代化の町として、滋賀県湖北地方の中心都市としての役割を果たしてきた。

これらを通して言えるのは、とりわけ繊維産業によって支えられてきた活発な地域経済のなかで、古いものを大切にしながらも新しいものを進んで取り入れる“進取の気性”に富んだ町衆たちが、自分たちの手で町を動かしてきたことである。「人が町を動かす」という気風は、今日に至るまでの長浜のまちづくりの原動力として、現代に生きる町衆たちに受け継がれている。

(6) 長浜ゆかりの先人たち

本市を中心とする滋賀県湖北地方は、京阪神と中京、北陸を結ぶ結節点として古くから重要な位置にあり、とりわけ戦国時代以降、日本史上の様々なドラマの舞台となってきた。長浜市から輩出した先人、長浜市にゆかりのある先人も数多く存在する。

① 豊臣秀吉（木下秀吉・羽柴秀吉）【1537～1598】

長浜は、秀吉がはじめて城持ち大名として治めたまちである。この地を今浜から長浜と改めたのも秀吉である。ちなみに秀吉はここから羽柴姓を名乗りはじめた。その後 10 年あまりのうちに秀吉は大坂城を築城し、関白・太政大臣に任ぜられ、天下統一を成し遂げた。



【豊臣秀吉】
長浜城歴史博物館蔵

② 石田三成【1560～1600】

石田三成は、戦国時代に土地の豪族・石田正継の子として、本市の南東部に位置する石田町に生まれ、少年時代を近くの大原観音寺（米原市）、あるいは法華寺（長浜市木之本町古橋）で過ごした。あるとき、この寺に、鷹狩りの途中羽柴秀吉が立ち寄り、茶を献じた三成の非凡さ（三碗の才）を認めて小姓にとりたてたといわれている。三成はその後、事務的な才能を買われ、25歳のときに従五位下、治部少輔に任ぜられ、豊臣政権五奉行の筆頭として活躍し、30歳で佐和山10万石（後に19万4000石）の領主となった。しかし、関ヶ原の合戦で徳川家康と戦い善戦したものの、小早川秀秋の裏切りで惨敗、伊吹山中に脱出し再起を図るが、木之本町古橋で潜伏中に捕縛され、京都六条河原で刑死した。現在、JR長浜駅前には、秀吉と三成の出会いを再現した「出逢いの像」が建てられている。



【石田三成】
長浜城歴史博物館蔵

③ 浅井長政【1545～1573】

小谷城主の浅井長政は、織田信長の妹であるお市を妻に迎え、茶々、初、江の三姉妹と2人の息子をもうけた。

元亀元年（1570）4月、信長が越前・朝倉攻めに進んだ際、長政は信長との同盟関係を反故にし、義を重んじて朝倉軍に加勢する。同年6月、激怒した信長は兵を整え、再び近江に侵攻し、浅井・朝倉連合軍は姉川を挟んでこれと対峙する。この姉川の合戦では、浅井・朝倉軍1万8千人と織田・徳川軍2万8千人が、姉川を真っ赤に染めるほどの壮絶な戦いを繰り広げ、浅井・朝倉連合軍は敗退する。

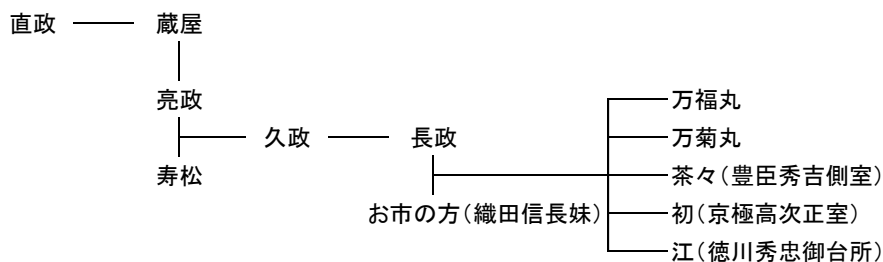


【浅井長政】
長浜城歴史博物館蔵

天正元年（1573）、信長は再び長政の居城、小谷城を攻める。長政は堅城・小谷城に籠城するも、信長の猛攻により落城することになる。長政は、最後まで自分に付き添っていたお市と3人の娘を城外に脱出させると自刃。こうして浅井家は滅亡した。

後にお市は柴田勝家に嫁ぎ、三姉妹はそのもとで暮らすことになるが、天正11年（1583）の賤ヶ岳の合戦によりお市は勝家とともに自刃、三姉妹は小谷城に次ぐ二度目の落城を経験する。三姉妹はこうして戦国の世に翻弄され続ける。のちに長女・茶々は秀吉の側室として、次女・初は京極高次の妻として、そして三女・江は徳川秀忠の御台所としてそれぞれの生き方を貫き、日本の歴史に大きく名を残すこととなった。

浅井氏略系図



参考資料：長浜城歴史博物館「戦国大名浅井氏と北近江」（2008）

④ ^{やまうちかずとよ}山内一豊【1545～1605】

尾張国に生まれた山内一豊は、父・盛豊の死後、母とともに流浪の生活を送った。一豊は流浪の末にいく人かの主君に仕えたのち、織田信長の家臣であった秀吉に仕え、信長の越前朝倉攻めでは秀吉の配下として武功をあげ、近江唐国（現長浜市唐国町）400石を信長から与えられ初めて領主となった。また、本能寺の変で信長が死去し秀吉の天下となると、そのもとで数々の功績を重ね、天正13年（1585）に近江長浜2万石、天正18年（1590）に遠州掛川5万石を与えられ、検地や築城、城下町経営に手腕を発揮した。慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いでは徳川方に味方し、家康が天下統一をなしたのち、一豊は土佐20万石の大大名へと拔擢され、土佐の礎を築いた。

⑤ ^{こぼりえんしゅう}小堀遠州【1572～1647】

小堀遠州は、坂田郡小堀村（現長浜市小堀町）で生まれ、近江小室藩主をつとめた大名である。日本各地の公的建造物の普請（土木工事）や作事（建築工事）に携わり、名古屋城天守閣の作事、伏見城本丸書院の普請、大坂城天守閣・本丸御殿の作事などを手がけた。また、作庭家としても才能を発揮し、仙洞御所庭園、二条城二の丸庭園、金地院庭園、南禅寺方丈南庭、遠州の菩提寺である孤篷庵庭園などは、遠州が作庭したものである。さらに、茶人としても名高く、戦国武将でありながら茶事に通じた古田織部から茶の湯の秘伝を受け、千利休とともに三大茶人とされ、遠州流茶道を創りあげ、秀忠・家光と徳川將軍2代にわたり茶道師範を務めた。遠州の美意識は「綺麗さび」として今日に伝えられている。



【小堀遠州】
長浜城歴史博物館蔵



【近江孤篷庵庭園】

⑥ ^{あめのもりほうしゅう}雨森芳洲【1668～1755】

雨森芳洲は、伊香郡雨森村（現長浜市高月町雨森）に生まれた江戸時代中期を代表する儒学者。幼いころは医学を志すが、のちに儒学に転じ、18歳で木下順庵の門下となった。22歳のとき、師の推挙を受けて日朝外交の窓口対馬藩に仕官し、対馬藩の外交政策に重要な役割を果たした。芳洲は、国際関係において平等互惠を旨とし、外交の基本は「誠心」にあると説いた。封建の世の中で、異文化の相互理解を説くその思想は、今日でも、国境を越えて高く評価されている。



【雨森芳洲】
芳洲会蔵

⑦ 国友一貫斎【1778～1840】

江戸時代中期に国友鉄砲鍛冶の家に生まれた国友一貫斎は、有能な鉄砲鍛冶であると同時に、気砲（空気銃）や懐中筆（万年筆）を発明し、グレゴリー式反射望遠鏡を製作するなど、さまざまな功績を残した科学者であり、東洋のエジソンとも呼ばれる。自作の望遠鏡は、月面や太陽の黒点を観測するなど精巧につくられており、これの売価により、姉川の氾濫や凶作による米価高騰に悩む国友村を救ったとされる。



【夢鷹図（国友一貫斎肖像部分）】
個人蔵

⑧ 大村彦太郎【1638～1689】

平成3年（1991）に惜しまれながら閉店した老舗百貨店・東急百貨店日本橋店の前身「白木屋」の創業者。長浜で生まれた彦太郎は、早くに父を亡くし、やがて京で材木商をはじめ、寛文2年（1662）、日本橋二丁目にささやかな小間物店を構え、積極的に呉服太物を扱った。この年が白木屋の創業とされる。三井高利が京都で越後屋呉服店を創業する10年前のことであり、白木屋は日本の百貨店の元祖とされている。白木屋の創業以来の店則は「商いは高利をとらず、正直に良きものを売れ、末は繁盛」であり、彦太郎は、正直と奉仕に徹する商法を実践してきた生粋の近江商人であった。

⑨ 西田天香【1872～1968】

大正時代のはじめから戦後まで、「近代日本の求道者」と評され、日本の思想界・教育界に大きな影響を与えた。無私の奉仕生活に専念し、精神文化の興隆に貢献した。無一物、無所有のなかに無尽蔵の喜びがあることを悟り、無所有の哲学は、現在も日本人に清明な影響を与え続けている。旧長浜市の名誉市民の第1号である。



【西田天香】
香倉院蔵

4 文化財等の分布状況

本市には令和7年3月1日現在、国の指定文化財が97件、国の登録文化財が37件ある。

国の指定文化財の内訳は、有形文化財として建造物11件、絵画8件、彫刻46件、工芸品14件、書跡・典籍2件、古文書3件、考古資料1件、歴史資料2件、また、民俗文化財として無形の民俗文化財1件、さらに記念物として遺跡4件、名勝地3件、遺跡名勝地1件、文化的景観として1件である。また、文化財の保存技術として選定2件、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財が1件である。国の登録文化財はすべて建造物である。

また、県の指定文化財は、有形文化財として建造物8件、絵画5件、彫刻16件、工芸品15件、書跡・典籍11件、古文書4件、また民俗文化財として有形の民俗文化財1件、無形の民俗文化財2件、記念物として遺跡11件、名勝地5件、動物、植物、地質鉱物2件、文化財の保存技術の選定2件、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財が11件の合計

第 1 章 歴史的風致形成の背景

93 件ある。

市の指定文化財は、建造物 16 件、絵画 29 件、彫刻 60 件、工芸品 25 件、書跡・典籍 3 件、古文書 43 件、考古資料 9 件、歴史資料 12 件、また、民俗文化財として有形の民俗文化財 12 件、無形の民俗文化財 8 件、さらに記念物として遺跡 18 件、名勝地 4 件、動物、植物、地質鉱物 10 件の合計 249 件ある。

以上を合わせて 479 件となっている。

第1章 歴史的風致形成の背景

表 長浜市に所在する指定等文化財の件数（令和7年3月1日現在）

種別			長浜市				
			国	県	市	合計	
			(国宝) 重文				
指定	有形文化財	建造物		(2) 11	8	16	(2) 35
		美術工芸品	絵画	8	5	29	42
			彫刻	(1) 46	16	60	(1) 122
			工芸品	(1) 14	15	25	(1) 54
			書跡・典籍・古文書等	(2) 5	15	46	(2) 66
			考古資料	1	0	9	10
			歴史資料	2	0	12	14
			美術工芸品 計	(4) 76	51	181	(4) 308
		小計 (A)		(6) 87	59	197	(6) 343
		無形文化財		0	0	0	0
		小計 (B)		0	0	0	0
	民俗文化	有形民俗文化財		0	1	12	13
		無形民俗文化財		1	2	8	11
		小計 (C)		1	3	20	24
	記念物	遺跡		4	11	18	33
		名勝地		3	5	4	12
		動物・植物・地質鉱物		0	2	10	12
		名勝・史跡		1	0	0	1
		小計 (D)		8	18	32	58
	選定	文化的景観		1	－	－	1
伝統的建造物群		0	0	－	0		
選定保存技術		2	2	0	4		
小計 (E)		3	2	0	5		
合計 (A+B+C+D+E)			(6) 99	82	249	(6) 430	
選択	無形文化財		0	0	0	0	
	無形民俗文化財		1	11	0	12	
	小計 (E)		1	11	0	12	
登録	登録有形文化財 (建造物)		37	－	－	37	
	登録有形文化財 (美術工芸品)		0	－	－	0	
	登録無形文化財		0	－	－	0	
	登録有形民俗文化財		0	－	－	0	
	登録無形民俗文化財		0	－	－	0	
	登録記念物		0	－	－	0	
	小計 (G)		37	－	－	37	
総 計			(6) 137	93	249	479	

※ 国指定文化財の有形文化財のうち、() の数値は「国宝」を示し、内数である。

※ 有形文化財、無形文化財、民俗文化財、記念物の欄は「指定」を示す。

※ 選定の欄は「選定」、選択の欄は「選択」、登録文化財の欄は「登録」を示す。

(1) 国の指定文化財

金銀鍍透彫華籠【国宝（工芸品）】

神照寺にある華籠は、散華の儀式に使用された。平安時代に製作されたものが5枚、鎌倉時代に制作されたものが11枚の合計16枚が現存する。宝相唐草文を透彫にしており、その意匠は極めて優麗で、高雅である。



【金銀鍍透彫華籠】
神照寺蔵

都久夫須麻神社本殿【国宝（建造物）】

都久夫須麻神社は、竹生島の弁才天信仰の最大の祭礼である蓮華会の際に、弁才天像を安置する弁才天社殿であったものが、明治初期の神仏分離製作により改められた神社である。

内装は絢爛豪華で、蒔絵や極彩色彫刻、桃山時代後期の絵師である狩野光信の作品と伝わる襖絵や天井画などがある。



【都久夫須麻神社本殿】

宝厳寺唐門【国宝（建造物）】

慶長8年（1603）年に豊国廟から移築されたとされる。全体を総黒漆塗としその上に鍍金の飾り金具がちりばめられている。極彩色の華麗な彫刻をはめ込んであり、豪壮で華麗な桃山建築の代表作である。



【宝厳寺唐門】

法華経序品（竹生島経）【国宝（書跡）】

大乘仏教の重要な経典である「法華経」の序本。平安時代後期に多く制作された装飾経の代表作の一つとして知られる。金銀泥で蝶や鳥、草花などの文様を大きく描き、流麗な書風で経文を書写している。



【法華経序品（竹生島経）】
竹生島宝厳寺蔵

木造十一面観音立像【国宝（彫刻）】

高月町渡岸寺の観音堂に安置されており、制作は平安時代（9世紀中ごろ）と思われる。伏し目がちで鼻筋が通り、小さな口を刻む秀麗な面貌には異国的な面影が漂い、大きな頭部を受けて、体部も重厚に造られている。数多くある十一面観音像のなかでも、傑出した像である。



【国宝・十一面観音立像が安置されている高月町渡岸寺の観音堂】

菅浦文書 菅浦与大浦下庄堺絵図【国宝（書跡）】

鎌倉時代から明治元年までの菅浦集落の決まりを定めた文書。菅浦は全国的にもいちはやく「惣」と呼ばれる自治の村落組織を形成し、集落による自治が行われてきた。1,200点を超える文書類からは中世から近世に至るまでの菅浦の歴史が詳しく記され、日本の村落史を調べるうえで重要な文書である。



【菅浦文書 菅浦与大浦下庄堺絵図】
須賀神社蔵

大通寺本堂【重要文化財（建造物）】

江戸時代初期の真宗別院本堂形式を伝える。伏見城の遺構という伝承があるが、明暦3年（1657）の建築と考えられている。内部は本尊を安置する内陣と礼拝する外陣にわかれている。本堂正面と側面の三方は広縁とその外側に一段低い落縁となっている。外観は、豪奢で比重のとれた、どっしりとした建造物である。



【大通寺本堂】

大通寺広間【重要文化財（建造物）】

伏見城の遺構を本願寺に移し、それを承応年間（1652～55）に大通寺に移築されたといわれており、建築手法からみて、その当時の建築とみられる。内部は3列3室の9室で構成され、各列の奥の一室は上段の間で書院造の要素である床、帳台構え、違棚、附書院などを一列に並べているところに特色がある。



【大通寺広間】

大通寺含山軒及び蘭亭【重要文化財（建造物）】

大通寺にある客間。含山軒は、遠く伊吹山を借景に取り入れた枯山水庭園を東側に配して、北側の一間には狩野山楽、二の間にはその子・狩野山雪の手になるという山水図の障壁図が描かれている。

蘭亭は含山軒の西側に位置する客室で、南面に坪庭風の池泉鑑賞式庭園を設けている。一の間から二の間に掛けて建物名称に由来する「蘭亭曲水図」の障壁画がある。



【含山軒】



【蘭亭】

北近江城館跡群下坂氏館跡・三田村氏館跡【史跡】

本市には、中世の在地土豪の平地居館が多数存在している。

下坂氏館跡には、室町時代の土塁、堀、主郭、副郭、腰郭の遺構が残っており、平地城館の様子を知ることのできる遺構である。下坂氏は京極氏との関係や浅井氏との関係上重要な存在であり、遺構の残りも極めて良好である。



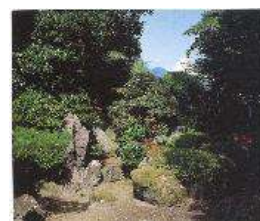
【三田村氏館跡 虎口】

三田村氏館跡は良好な状態で土塁が残存している。現在、三田村氏館跡には真宗大谷派の寺が所在しており、北面では半分以上が失われているが、これ以外はよく残されている。土塁から出土した遺物から土塁は15世紀後半から16世紀前半に造られたと考えられる。

大通寺含山軒及び蘭亭庭園【名勝】

大通寺客室の含山軒の東面に広がる枯山水庭園。中央の奥にはやや低い立木を植え、これらの植え込みの間から、約12km東方にそびえる伊吹山の6合目あたりから上を、借景として巧妙に取り入れており、名前の由来ともなっている。

蘭亭庭園は、含山軒庭園と同時代の作でまとまりのある小ぶりの庭園である。庭は含山軒の西に連なる蘭亭の南側に作庭されている。庭木には含山軒の庭園でみられるような巨木は用いず、梢の低い木を用いている。



【含山軒庭園】



【蘭亭庭園】

けいうんかんていえん
慶雲館庭園【名勝】

慶雲館は明治20年(1887)、明治天皇・皇后の京都市幸啓の際、行在所として建てられた木造2階建ての近代和風建築である。庭園は行幸から25年後の明治45年(1912)に再整備されたとみられ、灯籠などの多くの石造物が配されている。門から本館に至る前庭は露地風の平庭で、本館南の主庭は池と築山からなる。



【慶雲館庭園】

(2) 県指定文化財

しゃないうんごまどう
舎那院護摩堂【建造物】

市街地では最も古い建築物である。長濱八幡宮の神宮寺としての一院であり、明治維新の神仏分離令によって舎那院のみが残った。護摩堂は頭貫の木鼻や実肘木の絵様繰型などに室町時代の様式をあらわしている。



【舎那院護摩堂】

きゅうながはまきほんおく
旧長浜駅本屋【建造物】

明治15年(1882)に竣工した、長浜で最も古い時期に建てられた本格洋風建築であり、鉄道駅舎本館として日本最古のものである。木造構造の石灰コンクリート造り2階建て、外壁はコンクリート素面仕上げ、四隅の角は花崗岩の切石を積み、窓枠と出入り口にレンガを用いている。昭和33年(1958)に鉄道記念物に指定され、同58年(1983)からは資料館として一般公開されている。



【旧長浜駅本屋】

(3) 市指定文化財

だいつうじ だいどうこもん
大通寺台所門【建造物】

元長浜城の追手門おうちもんであったと伝えられている。文化5年(1808)に山門を起工するにあたって、それまでの表門が台所の正面である現在地に移された。門柱や側柱の用材、打ち付けられた金具等は創建当時のもので、桃山時代の様式を持ち、雄大である。



【大通寺台所門】

知善院表門【建造物】

元長浜城の搦手門であったと伝わっている。建築年代は明らかではないが、規模に差があるものの、大通寺台所門と共通した趣があり、同時期の建築と考えられる。小規模ながら木柄の大きな部材の使用や形式技法から、城門としての雰囲気漂わせている。



【知善院表門】

大通寺山門【建造物】

大型の二重門で、良質の檜を用い、精巧な彫刻を彫る。上層の中央後方の須弥壇に釈迦如来、弥勒菩薩、阿難尊者の三尊を安置する。山門両脇の山廊も華やかで凝った意匠を施し、丁寧な造作をしている。文化5年(1808)年から天保12年(1841)の完成落慶法要に至るまで33年の年月をかけた建造である。



【大通寺山門】

長浜城跡【史跡】

城跡は琵琶湖岸にあって、もとは今浜城といい、南北朝時代、佐々木佐渡大夫判官(京極道誉)が築城し、以後は家臣の今浜氏、或いは上坂氏が在城した。天正の始め、羽柴秀吉が入城して城下町を經營して、数年間居城した。その後、城主が代わったが、元和元年(1615)廃城となり、建造物および石垣の大半は彦根城に移された。



【長浜城跡に建つ長浜城歴史博物館】

長濱八幡宮放生池【名勝】

放生池の中心とはやや東寄りに中島を築き、この中島に八角円堂造の都久夫須麻神社の祠堂がある。社の正面と東側面に石橋をかけて、島に渡れるようにした池泉回遊式の庭である。中島の祠堂の前の豪宕な石組には天正ごろの面影がみられ、おそらく天正9年(1581)に秀吉の奉加によって、八幡宮の社殿を再建したころに、築かれたものと想像される。



【長濱八幡宮 放生池】

大通寺学問所庭園【名勝】

ケヤキ、カシ、モミジ、コウヤマキなどの植え込みの茂った間に三つの築山が並び、中央と右の築山の間に枯滝があって、ここに自然石の橋を架ける。菅浦石、小松石、守山石、姉川石、くらま石など、用いる石も種類が多い。



【大通寺学問所庭園】

（４）周知の埋蔵文化財包蔵地

市内には、縄文時代から近世に至る 800 件以上の周知の埋蔵文化財包蔵地が存在する。

長浜城遺跡は羽柴秀吉が築城し、その廃城となった長浜城があった跡地で、調査の結果、石垣の根石列、柵列、建物、軒丸瓦や鬼瓦などが出土している。

長浜城遺跡の東側にある長浜町遺跡は、室町時代初頭から明治期にかけての遺跡で、天正期から現代にかけての町家の遺構が検出されており、長浜城下町開設以降の変遷が明らかにされつつある。

（５）伝統芸能、伝統工芸

【無形の民俗文化財】

本市には長浜曳山祭をはじめ、郷土を彩る様々な芸能が伝えられている。

茶わんなどの陶器を秘伝の技でつないで飾り、高さ 10m にもなる曳山が曳行される「上丹生の曳山茶碗祭」、江戸時代に浄瑠璃の人形が村に伝わり、村人がその人形を使って浄瑠璃の稽古を始めたことが起源とされる「富田人形」、各地域に伝わる「太鼓踊り」など枚挙にいとまがない。



【上丹生の曳山茶碗祭】



【富田人形】



【太鼓踊り（下余呉）】

【浜仏壇】

本市のある湖北地方には、真宗王国といわれるほど多くの真宗寺院があり、人々の厚い信仰心を背景として、江戸中期以後、多くの家庭に仏間が設けられ仏壇が整えられるようになった。「浜仏壇」は長浜を代表する工芸技術であり、彦根と並ぶ仏壇の産地である。なお、長浜曳山祭の曳山の建造にあたっては、浜仏壇の工芸技術が随所に活かされており、浜仏壇の普及と曳山の建造は同じ時期でもある。



【浜仏壇】



【浜仏壇の銑金具】

【浜縮緬】

本市のある湖北地方では、もともと生糸と絹の生産がさかんであった。長浜付近で織られる縮緬は「浜縮緬」とよばれ、江戸時代から明治・大正・昭和期にかけて長浜地域の経済的發展をささえる大きな基盤となっていた。



【浜縮緬】

(6) 特産品、菓子、料理等

【湖魚料理】

あゆ、えび、しじみなど琵琶湖の様々な湖魚類を、醤油、砂糖で煮た佃煮や、豆や大根と一緒に炊くものもある。

【鮎鮓】

鮎鮓は日本最古の寿司といわれている。ニゴロブナにご飯を混ぜて発酵させた、滋賀県特有の「なれ鮓」で独特のにおいがある。



【鮎鮓】

【焼鯖そうめん】

長浜には「五月見舞い」という、農家へ嫁いだ娘のもとへ、親が焼鯖を届ける風習があり、その焼鯖とそうめんを甘辛く炊き合わせたものが「焼鯖そうめん」である。「焼鯖そうめん」は長浜曳山まつりの客人をもてなすためのハレの一品でもあり、現在も長浜市内の多くの店舗で食べることのできる、郷土料理である。



【焼鯖そうめん】